初版　2025年3月8日

児島虎次郎　油彩作品総目録

凡例　（目録掲載事項のルールについて）

＜掲載作品＞
現存を確認できた作品、および出版物等で作品のイメージを確認できた油彩作品を掲載します。
ただし児島の制作歴をたどるために重要な作品は、支持体、描画材を問わず掲載します。
各作品は、「作品名」「制作年」「所蔵者」「素材」「サイズ」「作品に記された文字情報」「主要展覧会歴（補足情報含）」をあわせて記載いたします。各項目については下記を参照ください。

【作品名】
現所蔵者が付した作品名を優先して掲載します。
所在不明作品や現所蔵者がタイトルを付していない場合は、児島虎次郎の生前に出版物へ図版掲載された作品名や、作品へ書き込まれた作品名を記載し、それもない場合は、モチーフ等に応じて（　）入れで仮題を付します。

【制作年】
公的な美術館等の所蔵品は、所蔵主の示す制作年を原則として表記します。
大原美術館所蔵作品は、「生誕 130 年　児島虎次郎展―あなたを知りたい」（2011 年３月）出品作は、その時点でのデーターを、同展不出品作は「大原美術館所蔵品目録」（1991 年 11 月）が示す制作年を尊重しつつ、確定的な判断がつき修正が可能なものは変更した制作年を記載します。
「生誕 130 年　児島虎次郎展」以降の収蔵作のうち、断定が難しい作品については、およそ近い制作年を想定できるものは「c.1〇〇〇」とし、三度の渡欧の往復路の海上風景や、四度の中国行に際して描かれた作品のように、制作年の絞り込みが難しいものは、「19〇〇年か？」と表記します。
その他の個人所蔵作品に関しては、およそ近い制作年を想定できるものは「c.1〇〇〇」とし、制作年の絞り込みが難しいものは、「19〇〇年か？」と表記します。

【所蔵者】
公的機関と、過去に所蔵者名が明記された所蔵者は、所蔵者名を表記します。
それ以外の作品は、原則「個人」として表記します。
図版のみ確認されている作品は（情報のみ把握）と記載します。

【技法・材質、サイズ】

図版のみ確認できる作品は、サイズは空欄とします。ただし、【習作展】、【作画展】、【遺作展】、【三角堂展】（下記【出品歴など（補足情報含）】参照）等でサイズ情報が尺数にて記載されたものは㎝に換算して、小数点以下 1 桁に四捨五入して記載します。

【年記、注釈など作品に記された文字情報】
没後の仕分けの際に付された白紙がある場合は「白紙」として記載された情報を示します。
大原美術館による証明書がある場合は「証明書」とし、発行年月記載を「証明書（〇〇年〇月）」と記します。
「白紙」「証明書」については、下記「児島虎次郎　残された作品について―凡例への注釈ー」参照のこと。
その他、サインや年記など、作品自体に付された情報のうち重要なものを記します。

【出品歴など（補足情報含）】
「児島虎次郎習作展覧会」は【習作展】、「児島虎次郎氏作画展覧会」は【作画展】、「Salon de la Societé Nationale des Beaux-Arts」は【SN】、「故児島虎次郎画伯遺作展覧会」は【遺作展】、「児島虎次郎画伯遺作展覧会」は【三角堂展】として、目録記載情報を掲載。制作年は西暦にて表記。ただし当該展覧会出品作と断定できない作品は、末尾に「？」を付します。
その他にも、帝国美術院展（帝展）など児島生前に出品された展覧会情報を記します。
あわせて「没後 70 年児島虎次郎」展（1999年）は【1999】「生誕 130 年　児島虎次郎展―あなたを知りたい」（2011年）は【2011】として、出品番号を記載します。
その他、文献掲載歴など関連情報を記載します。
各展覧会については、下記「児島虎次郎　残された作品について―凡例への注釈ー」参照のこと。

【掲載順】
データーの総容量が大きくなるため、合計七つの PDF データーに分けていますが、データーの番号順に、制作年順を基本として掲載します。ただし、主題やモチーフの類縁性を優先するため、一部、制作年が前後しています。

児島虎次郎　残された作品について　―凡例への注釈―

柳沢秀行
（公益財団法人大原芸術財団　シニアアドバイザー）

児島虎次郎（1881～1929）は、生前、二度の個展を開催しました。

最初は、1919（大正８）年４月の「児島虎次郎習作展覧会」、二度目が 1921（大正 10）年 9 月からの「児島虎次郎氏作画展覧会」です。

前者の「児島虎次郎習作展覧会」（以後、【習作展】）は、1919（大正 8）年から1921（大正 10）年にかけての二度目の渡欧を前にして、母校である東京美術学校で 4 月 1 日からの三日間、その後 4 月 14 日からの三日間を大阪の中之島にあった大阪中央公会堂で開催しました。両会場では、若干出品作に違いがありますが、1908（明治 41）年から 1912（大正元）年までの最初の滞欧期の作品から最新作まで 60 点以上の油彩画、さらに素描や屏風装の作品までが公開されました。児島としては、まだまだ「習作」であるとの認識から、この展覧会名となったのでしょうが、その実力を広く知らしめる重要な機会となりました。残念ながら、出品目録に記された作品名は「人物」「室内」「静物」など簡略な記載のみで、制作年と制作地をあわせて検討しても、多くの作品が、現存するどの作品なのかを確定することが難しくなっています。

次いで開催した「児島虎次郎氏作画展覧会」（以後、【作画展】）は、二度目の渡欧から戻った後、1921（大正 10）年 9 月 23 日から三日間、倉敷尋常高等小学校を会場に開催されました。これに先立つ同年 3 月に、二度目の滞欧期に収集し、後に大原美術館所蔵品の礎となるクロード・モネ《睡蓮》、アンリ・マティス《マティス嬢の肖像》など西洋絵画 27 点を「現代仏蘭西名画家作品展覧会」として倉敷で公開し、大反響を呼びました。その熱気を受けるように秋となって児島自身の作品展が開催されます。この展覧会ではやはり第一次滞欧期から近作までの 47 点が公開されました。出品目録では、作品名、制作年、制作地と、【習作展】と同じ項目が記載されていますが、こちらの作品名は、より具体的で、現在確認されている作品とかなり一致しており、その出品概要をうかがい知ることができます。

児島虎次郎は、1929（昭和 4）年 3 月に、残念ながら 47 歳の若さで逝去してしまいます。生前、児島の生活費、活動費の一切を提供することで彼の創作活動を支援し、また西洋での美術作品収集活動の費用を提供していた大原孫三郎は、児島逝去の翌年となる 1930（昭和 5）年 11 月に、児島が収集にあたった西洋の美術作品と、児島自身の作品を公開するために大原美術館を開設しました。

それに先立ち、大原は、児島の画業を良く知る藤島武二、満谷国四郎、太田喜二

郎、吉田苞の四人の画家に、児島が描き残した 700 点ほどの作品の整理と仕分けを依頼します[i]。

児島の制作時期は、東京美術学校に入学した 1902（明治 35）年から逝去した 1929（昭和4）年までの四半世紀ほどと、けして長くはありません。ただ、それだけの期間でも多数の大作を含め 700 点あまりを描き、また大原からの経済的支援ゆえ、ほぼ作品を手放さなかったことも重なって、一人の画家の生涯にわたる制作品の大半がまとまって残されるという、近代日本美術史上でも稀有な事態が起こることとなったわけです。

おそらく、その仕分けに際して、作品の裏側には、制作時期を区分するアルファベット[ii]と、その各時期（同じアルファベットで示される）の中での通し番号、そして尺数での表記によるサイズを墨書した白紙が貼られます。また、この時に控えとして記されたと思われるノートや、アルファベットが示す制作時期がどの時期なのかを区分した一覧表が、大原美術館に残されています。

こうした仕分けのうえで、大原美術館開館に先駆けて 1930（昭和 5）年 4 月 23 日～30 日まで、岡山市にあった合同第一銀行（大原孫三郎経営）の三階ホールで「故児島虎次郎画伯遺作展覧会」（以後、【遺作展】）が開催され、75 点の油彩画、その他に六曲一隻の屏風など複数点が公開されました。まさに、藤島達が「これぞ児島虎次郎！」と選び抜いた作品の展観であり、この【遺作展】に出品された油彩画が、大原美術館所蔵の児島虎次郎作品の中核となります。

作品目録には、作品名、制作時期、制作年が記載されますが、作品名が【作画展】同様に具体的であること、またやはり大原孫三郎が経営した新聞「中国民報」でこの展覧会の詳細が報道され、作品写真も多数掲載されたため、出品作品の大半が確認できます。

それから、おそらくは残された家族の生活のために、大原美術館所有とした以外の作品の売却が試みられます。それが、岡山にも縁の深い薄田晴彦が経営する画廊「三角堂」主催として、1936（昭和11）年 2 月 20 日から四日間、大阪の中之島にあった朝日会館で開催された「児島虎次郎画伯遺作展覧会」です（以後、【三角堂展】）。この展覧会が売却目的であったこともあり、モノクロ図版ながら 102 点が掲載された図録も制作されます。結局、売上は芳しくなく、この出品作から、また改めて大原美術館所蔵に加えられたものもありますが、100 点もの作品が図版掲載されたことで、現在残された作品と照合できることは、どのような選別が児島虎次郎没後に行われたのかをうかがい知る貴重な資料となります[iii]。

それから、この展覧会に際して、縦長の紙が作品裏に付されます。そこには「児島虎次郎作品タルコトヲ証明ス　財団法人大原美術館」と印刷され、捺印の上、発行年が手書きされました。この札型の紙は、その後も長きに渡り使用されることがあり、その都度の発行年が手書きされています。

ここまで【習作展】、【作画展】、【遺作展】、【三角堂展】を紹介しましたが、この四つの展覧会が、児島生前から逝去直後までの作品の動きを知るために重要なものとなります。

それから、児島はフランスの **Salon de la Societé Nationale des Beaux-Arts**（**以後、**【SN】）に1911（明治44）年の初入選以来、日本にいる時でも出品を続け、二度目の渡欧時となる 1920（大正9）年には正会員となっています。目録に残されたフランス語でのタイトルが出品作品を推測する貴重な情報となります。その全てを同定するには至っていませんが、出品作は、その時点で、児島が最も重要と認識した作品ですので、やはり注目すべきものです[iv]。この他にも、日本国内で開催された帝国美術院展覧会など、いくつかの展覧会への出品が知られています。

さて、【三角堂展】以降も三角堂などでの売り立てが継続されますが、大原美術館所蔵となった作品以外の大半は、明確に児島家所有となったものもあれば、大原家や、倉敷市酒津の児島旧宅に置かれたまま、所有権の明確でないままの作品も複数あったと考えられます。

1950（昭和25）年4月27日の日付が残る「大原邸ニ於テ調査記録」と記された手書きリストが大原美術館に残されています。そこには、没後の仕分けの際に付されたアルファベットと通し番号、サイズが表記されたうえ、この時点で、さらに付されたであろう「a」「b」、「○」「×」、「い」「ろ」が組み合わされた仕分け記号と、簡略な作品名が記されています。

虎次郎の長男虓一郎からの、残された作品の所有権についての相談を促す書簡も大原美術館に残されており、おそらく、この1950年頃に、全ての作品の所有権を明確にする再協議が成されたと考えられます。

それを受けるように、1950（昭和 25）年から翌年にかけて、大原孫三郎の嫡子大原總一郎が主導して、倉敷市内の小学校、中学校、高校や、市役所、警察署などの公的機関に児島虎次郎作品が寄贈されています。また児島家所有作品として18点が1951（昭和26）年に児島虎次郎の故郷である成羽町に寄贈され、その後も、児島家所有作品の同町への収蔵が続き、これらの作品群が、現在の高梁市成羽美術館の中核となっています。

こうして児島作品の大まかな動きが落ち着くことになりますが、以降は、大原美術館、そして成羽町の所蔵作品を主体とした児島虎次郎の作品展が散発的に開催されます。ただ、学術的な裏付けを伴った大型企画展覧会は、1999（平成 11）年から翌年にかけて大原美術館と成羽町美術館（現在の高梁市成羽美術館）の両館を含め全国 9 会場を巡回した「没後 70 年児島虎次郎」展（同展実行委員会）を待つことになります。そして、この展覧会にも関わった松岡智子が、一連の研究の集大成として『児島虎次郎研究』（中央公論美術出版）を 2004 年 12 月に刊行しま

す。

　さて、「没後 70 年児島虎次郎」展以降、大原美術館は、児島虎次郎のカタログレゾネを制作すること目指し、ようやく 20 年をかけて、今回、暫定版ながら WEB で公開するに至りました。
　私は、2002（平成 14）年に大原美術館に学芸員として着任して以来、この課題に向き合うこととなりましたが、その時点では、大原美術館所蔵作品についても、制作年や作品名の再確認から始めざるをえない状況であり、遅々として作業も進まぬまま 20 年以上の月日が流れてしまいました。この点は、我が身の怠惰を恥じるばかりです。
　ただこの間、私のみならず、大原美術館の学芸員を挙げて、日本各地に残る児島作品を訪ね、この目録でご紹介できる作品を実見する機会を得ました。同時に、大原美術館内に残された資料や、各種の文献調査を進め、ここまで記してきたような、作品裏に貼られた白紙などの意味付けや添付された経緯も把握できるようになりました。その作業の進捗に伴い、作品来歴のおおよその流れがわかってきたわけです。また、そうした整理に伴い、例えば、「没後仕分けの際に付された白紙について、添付の痕跡もない場合は、児島生前に他者へ譲渡されたもの、あるいは偽物」「大原美術館が所蔵する作品で、三角堂売り立ての際の証明書が添付されたものは、最初の売り立てで売却されず、改めて収蔵となったもの」といった作品判別のルールも自明のものとなってきました。
　こうした蓄積の反映が、2011（平成 23）年に大原美術館が開催した「生誕 130 年　児島虎次郎展―あなたを知りたい」となりました。また同展開催以降、さらに多くの作品についての情報が当館へ寄せられるようになります。
　とはいえ、逝去直後に残された作品が 700 点だとすれば、まだ所在を確認できないものは多く、この点は、さらなる情報を待たざるを得ません。なにより、作品名と制作年について断定できないものが多いことは、自らの調査、研究能力の非力を嘆かざるを得ません。しかし、この度の、大原芸術研究所開設に際して、中途であろうと情報を公開することに意義があると考えました。
　ここでは PDF ファイルとして作品についての基本的な情報を公開いたしますが、各作品についてより詳細な情報を把握しております。研究者の方や高い関心を持たれる方には、お声がけいただければ、その詳細をお伝えさせていただきます。またこの目録中の不統一や誤記があった場合、責任は全て柳沢にありますので、厳しくご指摘いただければ幸いです。
　さらに、今後は、WEB においても、そうした詳細な情報を提供することと、そして冊子としての児島虎次郎カタログレゾネと、児島虎次郎についての総合的な研究を世に届けるための活動を継続してまいります。

[i] 児島直平『児島虎次郎略伝』（児島虎次郎伝記編纂室　1967 年）

[ii] 分類は、以下のとおり。

A　1902～1907　東京美術学校在学

B　1908～1911　1 次渡欧

C　1912～1917　帰国以降

D　1918　1 次中国旅行

E　1919　中国から帰国～1921　2 次渡欧

F　1921　帰国以降

G　1921　2 次中国旅行

H　1922～1923　3 次滞欧

I　1924　帰国以降

J　1926　3 次中国旅行～逝去

[iii] 吉川あゆみ「『大原美術館日記』にみる「児島虎次郎画伯遺作展」の動き」（『生誕 130 年　児島虎次郎展　―あなたを知りたい』図録　大原美術館　2011 年）

[iv] サラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品について」（前掲『生誕 130 年　児島虎次郎展　―あなたを知りたい』図録）